

## 開堂供養の辭

日本国仏教沙門 藤井日達

現代文明は科学文明と呼ばれる。科学文明は十六世紀の頃から歐羅巴に発生し、独自に発達暴走して、其結果は人類全滅と自然環境破壊に猛威を振ひつつある。

人類全滅も環境破壊も必しも科学独自の目的でも無く又、其科学の意志でも無い。人類全滅・環境破壊を行ふ者は科学を応用する軍隊組織と大企業である。

軍隊と大企業とを活動させて人類全滅・環境破壊を行う者は近代国家の政策である。其政策を定めて是を実施する者は國家権力である。国家権力と云ふ者も所謂は國<sup>くに</sup>各個の意志、思想信念の結集に外ならない。其国民の意思想を指導する者が所謂宗教である。

此所北米合州国の首都、華盛頓に日本の仏教の道場を開設する所以は、アメリカの国家権力が実行しつつある戦争政策、就中アジア侵略政策とアメリカ国民の信奉せる基督教に就て聊か疑問を提起して、人類の希望する天下太平・國土安穏の建設に貢献せんが為である。

旧約聖書 創世記 第一章に曰く

「一、はじめに神は天と地とを創造された。すなまち、神の形に創造し、男と女とに創造された。」

創世記第二章に曰く  
「一、こうして天と地と万象とが完成した。  
七、主なる神は土のちりで人を造り、命の息を其鼻に吹き入れられた。

そこで人は生きた者となつた。」

「一九、あなたは額に汗してパンを食べ、遂に土に帰る。あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る。」

第三章に曰く、

すからざる問題である。

苟も聖書を信ずる者としては、主なる神の此の如き人類創造の説を信受するであろう。是に由て其信ずる人の人生觀が成り立つが故に、等閑に付

神は自分の形に似せて土の塵を取て人を造り命の息を其鼻から吹き込んだので人は生きた者となつたと云うことは、凡そ人類は一種の土で造られただ生命有る動物であると云ふことになる。それだから、生きんが為に労働して食物を作つて食べねばならぬ。食物を食べた後は但だ死んで本の土のうちに還元されてしまへばそれでおしまいになつてしまふ。死んだ後の未

来世の問題には全然関係が無い。是の如き人生觀は現代の唯物論者の説く所と何の相違も無い。

聊(さう)かも人類の人類たる所以は土のちりで造られたからでも無く、呼吸

所と何の相違も無い。

-3-

「五、主は人の悪が地にはびこり、總て其心に思ひはかる事がいつも悪い」  
旧約聖書 創世記 第六章に曰く

凡そ人類社会に於て殺人戦争を行ふ者は男子であり、和平を願ふ者は多く女人である。平和の使節として女人を造るには、須く花を取て女人を造る可きであった。  
争の大集團となつたのも、其根本は神の肋骨剥取アキレスヒールにあると想はれる。  
欧羅巴諸国が不斷に國際戦争を行ひ、歐羅巴に發生した近代國家が軍備戦信する者をして、人類社会に冷淡に血の歴史を綴らしめたる根源である。  
身体を安<sup>セイ</sup>りに切開し、其あら骨をえぐり取つた(と云ふこと)が、聖書を人体に全身麻酔を施して、苦痛を感じ無いやうにして、生きて居る人類の是の如き女人創造は現代医学上、行はれつつある生体解剖手術である。

「れて來た(られた)。」

二二、主なる神は人から取つたあら骨で一人の女を造り、人の所へ連つを取つて其所を肉でふさがれた。  
二一、そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、其あら骨の一創世記 第二章に曰く、

乱暴である。

更に人類創造に関して主なる神の重大なる過失は、残酷なる女人創造の往かねばならぬ。  
創造の手落ちである。此創造の手落ちに由て人生觀が永久に低下し堕落し故に神の心を人類に吹き込まなかつたのか、是が主なる神の重大なる人類は但だ形而下の物に局て形而上の者を創造して居ない。人類創造の初に何る為に其特徴がある。それを考ふるもののが則宗教である。主なる神の創造土に還るからでも無い。人類は精神的存在として死後未來の生命を考ふをするからでも無く、労働して食物を造つて食べるからでも無く、死んで

事計りである(の)を見られた。  
六、主は地上に人を造ったのを悔(いて心を痛め、  
七、『私が創造した人を地のおもてから拭<sup>ぐ</sup>い去る。人も獸も這う者も、  
空の鳥までも、私は是を造った事を悔い』と云はれた。』

地上の一切の生命有る動物を一時に地上から拭<sup>ぐ</sup>ひ去<sup>つ</sup>して全滅せしむ  
るとは、まことに恐しき神の呪ひであり、恐しき神の仕業である。  
人に病があるから救済がある。人の悪が地上にはびこるのを見て、全滅  
を計画する既然に、なぜに神は教化を為(さ)なかつたか。人の悪が地上に  
はびこるのは何時迄待つても止むことは無い。それが人類社会の現実である。  
にあらねばならぬ。神なるが故に一切衆生を總て生命有る者を殺害し、全  
滅せじめても、それは犯罪とはならぬのか。神の殺害全滅が犯罪となる  
類全滅の神の呪ひは今日基督教國<sup>キリスト</sup>と称する北米合衆国に由て完全に繼承された。

第二次世界大戰の終末期に日本<sup>すなわち</sup>の廣島と長崎とに原子爆弾<sup>原子弹</sup>を偽<sup>いつわ</sup>て和平の守護神は、則<sup>すなわち</sup>其第一段階である。爾來<sup>じらい</sup>アメリカは原子爆弾<sup>原子弹</sup>を偽<sup>いつわ</sup>て和平の守護神と称し、國力を挙げて原爆水爆核兵器の開發蓄積に努力して居る。それはやがて人類全滅の道具となる。又、ベトナム帰還兵の証言の中に、アメリカの絶滅戦が証言された。

「我々は膨大な量の通常兵器・數十萬の軍隊・ストレンジラブ博士の新兵器をつぎ込みました。我々は何の武器も持たない国に對して空軍を使い、海軍を使いました。それでもまだ満足しないで戦争はまだ続いており、ベトナム人はまだ戦い続けています。それは絶滅戦と呼ばれます。総ての戦争は絶滅戦です。越南<sup>ベトナム</sup>のやうな農業社会では絶滅戦と云ふ場合、但だ一事

を意味します。抵抗の手段の破壊、則人々を抹殺する事であります。

我が国は我が国が彼の国に押(し)付けやうとしているのに、ベトナム人が抵抗するのをやめさせるにはどれ程の数のベトナム人を殺す必要があるかに就ては、

極めて系統的に目標を定めてきました。

私の考(え)では是は政策です。」

旧約聖書(創世記 第六章)に曰く

「十一、時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。

十二、神が地を見られるとそれは乱れていた。総ての人気が地の上で(其)

道を乱しからである。」

「暴虐が地に満ちた」とは北米合州国現在の社会状態である。

然らば神の呪(ひ)を被て崩壊し全滅す可き運命はアメリカに巡り来つ

ある。今且くアメリカの代表としてニヨークに就て一九六八年の犯罪

を挙げて見よう。強盗が五万四千四百五件、一日平均一五〇件、東京の百

五十七倍、ニヨークで其携帯品を盗まれないやうに注意するよりも、

盗まれたならば又、買へばよいと考ふる方が一種の生活の智恵であると云

殺人が九〇四件、毎日平均二人半が殺されつゝある。殺人も爆発も大抵

警察は呼ばない。秘密に殺されて蒸発し殺人罪として報告され無い例は多

いから、実際の殺人罪の件数は更に多い。戦争中のベトナムと、平時のニューヨークと比較して何れが危険であるかは分からぬ。

人が殺された時、犯人の中に警察がまじっているのが常識であり、殺された者は殺され(つ)放し、殺した者は殺し(つ)放し、是が全く普通の出来事である。

女性が暴行されたる件が書物になつておる。

東京の六倍に当る。日本国に於ても終戦後、進駐軍兵士に関して日本の強姦事件は一八四〇件にして、毎日平均五人の女性が暴行されている。

クの方が余計に目に付く。

乞食の数は、戦争による避難民の溢るサイゴン市中よりもニューヨークの方が多いことは二ユーヨークが、そしてアメリカが世界第一である。アメリカ史は最初から現在に至る迄の重要なテーマは西部開拓史に見られるやうな無法と絶えざる暴力である。此テーマはアメリカが地球上で重要な位置をしめる国となつても変わるものではなく、寧ろ已前にもまして重要なテーマとなつていて。

現在のアメリカは人類歴史上未曾有の最大の暴力を海外で振った事実の為に、精神的にも道徳的にも倫理的にも経済的にも破綻を示し、東南アジアの侵略がアメリカの崩壊をもたらす凶兆となりつつある。

(旧約聖書 創世記 第六章に曰く)

「十三、そこで神はノアに云はれた。『私は総ての人を絶やそうと決心した。彼等は地を暴虐で満たしたから。私は彼等を地と共に亡ぼさう。』

ノアの洪水を起(こ)した神は正に審判の神にして救済の神では無い。大洪水に由て突然溺死した一切の動物、なかんずく人種等は何所で救済されるのか。凡も神の仕事は、悪を見て審判して溺死させるのが究極の仕事であるのか。凡もその宗教は未来世の救済を約束するものである。生命の永遠性を信ずる時、もし未来世の救済が約束され無いならば宗教的には失格の神である。悪事を為す者を見て之を亡ぼす事は、悪魔の仕事と其の殺生全滅に於て区別は無い。

審判の神は、暴虐に満ちたる現代を滅ぼす神にして断じて現代を救ふ神では無い、現代を呪ふ神にして現代を教化する神では無い。

ればならぬ。暴力殺生を禁じて非暴力不殺生の一戒を持つ神でなければならぬ。

或い人は私をして神を漬つけす者と云ふかもしれぬ。然しこれは聖書の

※1

剃取えんしゅ←えぐりとする

神を指して人を瀆す者と云ふ。

## 牧野記

- 13 -

恩師聖人様の「開堂供養の辞」は一九七四年（昭和四十九年）米国首都ワシントン道場開堂供養の際に準備された草稿と聞いて居ります。  
あるキリスト者の進言もあり、実際には公表をさし控えられた未発表のもの  
あります。  
英國倫敦道場の永瀬行朗上人が遺された草稿を整記され、日蓮宗の山口紀洋尚、表題の「アメリカの神に問う」は恩師聖人の御意を取り、拙子・牧野（アメリカがイラクに対し戦争を開始したまさに此時、此の一文は遠く西洋文明の根源を問う謙曉の書ともなりました。）

茲に限定百部を発刊し、心ある方々の御高覧に供し度く存じます。

文明の根源を問う謙曉の書ともなりました。

が仮題としたものです。

が仮題としたものです。

後記

- 12 -

#26-7